

# 中原中也



特別寄稿

## 「富永太郎の書簡と正岡忠三郎日記」

——正岡家資料について

佐々木幹郎

## 「吉田緒佐夢の人間像」

和田 健

◎新資料

ランボオ詩集《学校時代の詩》

神保光太郎 詩集『帰郷』

◎特別企画展

## 安原喜弘宛書簡

平成12年度行事

第6回中原中也賞 受賞作品

平成13年度行事予定

# Chuya Nakahara Memorial Museum

## 中原中也記念館

# 館報2002

7

Public relations magazine

第7号

館長 ごあいさつ

## 『末黒野』の背景

福田百合子

平成12年秋の企画展では、「短歌」詩世界への出発点」として、中也の初期短歌を採り上げました。中也の最初の刊行物である歌集『末黒野』は二人の先輩格の人たちとの共著です。その筆頭、吉田緒佐夢のご遺族の方々と、企画展のご縁でお目にかかる折を得更に、『思索日記』（吉田理）と本名を記した思い出日記を見せていただくことができました。

内容は、随筆と短歌が主体です。特に、短歌には当時の山口市内の様子や、中也にも影響を与えた歌風の一端を窺える作が多く、感慨深く読みました。一部を次に抜粋して見まじょう。

萩から山口へ（追想）

長門路を周防に出づる国さかいその旧道に熊笹しげる

一の阪高き（坂）にありて見ゆるかす山口の町は山の中に見ゆ

大内氏の古き都の山口は山の中にありて遠くし望まゆ

トンネルの茶屋に売りをる名物白外郎の鑊ひし看板

幾世経む名物外郎（名）にして食ひめ類白の澄音聞まじし

右の歌に登場する「長門路」は中也詩「冬の長門峡」に近い山越えの道、また「一の坂」も、大内氏も山口ゆかりのなつかしい名稱です。名物のお菓子「外郎」（ういろう）は、中也の好物物でもありました。恋人長谷川泰子は、中也が帰省する度にお土産として買った、懐古談の中で述べた由、中也の初期短歌から、色々な背景が展開してきて嬉しい限りでした。

「ご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。」

# 富永太郎の書簡と 正岡忠三郎日記

## 正岡家資料について

### 佐々木幹郎

text: Mikio Suzuki  
(詩人「新編中原中也全集」編集委員)

正岡忠三郎が亡くなったとき、司馬遼太郎は次のような手紙を読んでいる。

「大人や、その生涯において多くの朋友に恵まれ、宝石の山にあるが如し。／東京府立一中に学ぶや、詩人富永太郎を知り、その詩才を見抜き、ともに仙台の第二高等学校に進み、富永太郎の詩業を協く。のち富永太郎とともに詩人中原中也を知り、その詩才を発見し、その詩業を協く。富永は二十四歳にて死し、中原は三十歳にして死し、ことごとく夭折す。富永、中原両家の詩業を研究する者は、忠三郎の大人と両家のあいだに往來せし手紙の類いを研究せざるをえず。富永、中原の人間と文学についてすぐれたる研究をなした大岡昇平の大人も、戦後、軍隊から帰還するや、まっす



「海への思ひ出」

また、富永の絵画のうち淡彩素描である「上海の思ひ出」は、富永が中原と京都で出会った時期に描かれ、正岡忠三郎に贈られたもの。正岡家の居間に、長く掲げられていた絵画だったという。

中原中也記念館に収められたこれらの資料と、富永家が神奈川近代文学館に寄贈した富永資料とを合わせる、富永太郎が残したすべての文獻と遺品は揃ったことになる。ところで、今回収められた正岡家資料の中で特筆すべきなのは、大正10年から昭和10年までの「正岡忠三郎日記」二冊と、忠三郎の母ひさの日記一冊が含まれていることである。

特に大正14年の「正岡日記」には、忠三

くに伊丹の正岡家に至り、忠三郎の大人に会い、徹宵して富永と中原について語る。このことによりても、忠三郎の大人がいかなる大人かを想像するに足る。したがって、正岡忠三郎の大人に對する、司馬遼太郎の発言「中央公論」平成8年9月号臨時増刊。

いかに司馬氏が正岡氏を敬していたかがよくわかる文章である。この手紙は昭和51年9月12日、忠三郎の葬儀の日に読まれた。それから五年後、司馬氏は「人々の發音」(昭和56年)を刊行した。この本は明治時代の正岡子規から始まり、その養子としての忠三郎の生涯と、彼が青春期を送った大正と昭和の時代を描き、司馬文学の粋を集めた長編であることはよく知られている。

今回、正岡家の遺族、次男明氏のご好意

郎が中原と京都の居酒屋で出会ったときのこと。その後中原に富永を紹介し、三人で会った京都のカフェの名前、誰の下宿で何を食べたか、円山公園で酒をどくくらい飲んだか、そんなことまで几帳面に書き留められている。京都時代の中原と富永を知るには、この「正岡日記」ほど貴重なものはない。

大岡昇平は中原と富永について書くときしばしば「正岡日記」を引用した。しかし、日記に書かれていた文章のすべてが引用されたわけではない。また、大岡氏は日記帖そのものを参照したのではなく、正岡氏が日記帖からピックアップして原稿用紙に転写し、大岡氏に資料として送ったものから引用していた。当然、転写時には正岡氏による文章の取捨選択があり、大岡氏の引用間違いなども起きたとも思われ、「日記」原本の文章と大岡昇平の引用文とは、本文が微妙に異なる結果になっている。

正岡明氏の話によると、これらの大量の日記帖の存在がわかったのは、阪神大震災のおかげであった。伊丹にあった正岡家が震災で半壊状態になり、家を整理しているうちに、戸棚の奥から転げ落ちていたのを発見したという。それまで、正岡忠三郎がこれほど多くの日記をつけていたとは、子息も、友人たちの誰もが知らなかった。

「正岡日記」の、富永の終焉前後を記した数頁は、臨場感があふれ返っている。大正14年11月5日、京都にいた正岡氏は「タロウキトク」の電報を受け取った。同日6日、富永家に駆けつけた正岡氏は、酸素吸入をしている富永と筆談をしている。「正岡日記」によると、富永は臨終の床で

よって、大正10年から大正14年までの正岡忠三郎宛富永太郎書簡152通と絵画と詩稿、および大量の同時代の友人たちの書簡などが、中原中也記念館の所蔵することとなった。これらは、中原と富永を研究する上で第一級の資料であることは言うまでもない。大正末期の富永のフランス文学受容のレベルが、いかに高度であったか。その富永が中原と小林秀雄に、どれだけ決定的な影響を及ぼしたか。それらは今後ここに収められた資料を調査することで明らかになるだろう。



正岡忠三郎  
出典：『年表作家談本館中也』  
1965年刊 河出書房新社

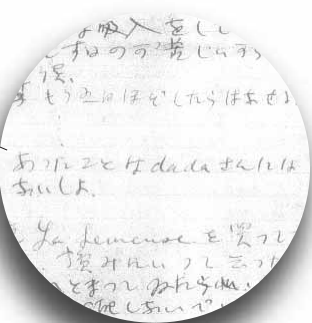
また、中原と富永とが京都で出会った時期の富永書簡については、わたしはこれまで大岡昇平の「富永太郎 書簡を通して見た生涯と作品」(昭和49年)での引用文でしか、確認することができなかった。しかし、そのすべてが今回の正岡家資料の中にある。オリジナルを實際に目で確かめることができるようになって、初めて見えてくる問題も数多くあるだろう。

例えば、まるで美術品のように美しい大

次のように書いた。  
「(僕と筆友)あつたことばgagadaさんにはないし、  
この箇所「日記」原本に残された文字の震えなく、正岡忠三郎が当時、不眠不休で看病していた様子が浮かび上がって生々しい。  
中原中也記念館には、中原の友人たちの遺稿、遺品が次々に集まり始めた。生きていたときの中原の交遊圏のありようが、記念館で再現できるとしたら、こんなに楽しいことはな。



「正岡日記」 大正14年11月6日



富永太郎



# 吉田緒佐夢の人間像

text=Takeshi Wada

和田健 (詩人)



吉田緒佐夢

## Osamu Yoshida



歌集『末黒野』

かくて平成12年11月19日、中原中也記念館で緒佐夢の四女福山朋子さんと一家と私たちが会うことができた。そして、緒佐夢の夫人(93)も健在と知った。

中也に最初の人生勉強を仕込んだのは、この緒佐夢ではなかったかと私は動揺する。当時、大正11年前後の早熟な少年中也のことを考えていると、周囲の状況などからその推測される。文学青年、吉田緒佐夢は、それほど群を抜いて輝いていた。

吉田家の出自は、なかなかの名門である。毛利氏に仕え幕末には大組五百石余の禄高だったといえは高級士族。明治になり萩江向から三見村に移る。吉田緒佐夢はこの地で、明治35年7月7日に生まれる。父・吉田六蔵、母・ヨシの二男。六蔵は村の助役などしている。

緒佐夢の学歴は不明だが、代用教員も、あれだけの学識を有していたことは、持つて生まれた天分だけでなく、かなりの勉強をしたことが想像される。

彼が防長新聞社に入社したのは、大正10年12月である。「麗筆を紙面に揮ひ読者の歓迎を享け尔来四年一カ月勤務した」と、防長新聞六十年史。(昭和18年5月1日刊)に出ている。大正14年1月退社。

宇佐川紅萩、中原中也と、末黒野」を出したのは大正11年春。緒佐夢20歳、紅萩は山口中学四年、中也は同じく二年生だった。緒佐夢はすでに新聞社に在職していたが、収録した短歌は入社以前の投稿家時代のものを含んでいると思われる。

新聞社をやめた理由は彼の奔放な行動というが、同志と防長青年党と称する政治結社を組織して県下を遊説して回ったので、

## 中也と山口歌壇

中也は、両親の影響を受け、小学三・四年生のころから短歌を作るようになり、中也が短歌を作っていた大正7〜12年頃は、山口周辺でも盛んに結社が組織され、数多くの短歌雑誌が発刊されるなど活発な活動をしていました。現在確認ができるものは「白梅」「こたま」「小さき芽」の三誌です。

「白梅」(大正11年7月〜大正14年3月推定)は、「防長短歌大会」の主宰者で大正12年から地方紙「防長新聞」歌壇欄の選者でもあった毛利善堂が主宰した雑誌です。中也も投稿していたのではないかと推測されていますが、三十一冊全巻揃ったものが発見できず断定できません。

「こたま」(大正2年7月〜大正9年6月)後に「木霊」と名を改めた。は、中也と吉田緒佐夢と歌集「末黒野」を出版した宇佐川紅萩が恩師と慕っていた。田村盛

「われは無口/中也さん又/無口にて/」第三書房に/向ひ/坐りき 保一」

中也は、黒い吊り鐘マントを着、下駄を履いて、よく友廣が経営する古本屋「第三書房」(現在の山口市米屋町)に訪れたといわれています。

短歌青年たちの多くは、その後も終生短歌活動を続けていました。

かりの上海に晋作の銅像を建てよと演説したこともある。あるいは昭和5、6年頃、東京の万朝報に入社し、給料はきちんともらえなかったが株で大儲けをして、その金で三十数名の団員を擁する劇団を買収し、関東一円を一年あまり興行を打って回ったとか。

若年にして詩人・歌人あるいは天才とでもはやされた快男児吉田緒佐夢も、遂に中也と肩を並べる夢を結ばず昭和40年12月23日、堺で他界した。時に六十三歳であった。

結句晋作や維新の志士にあこがれ、自ら防長のドン・キホーテをもって認じていたくらいである。

辞めたものどこの新聞社も雇ってくれないので、やがて萩に帰って吉田狸眠洞と号し、「長周日新聞」の主筆となり筆陣を張る。また、文化運動にも参与し活動を展開する。傍ら吉田松陰に関する執筆や、萩を動かす人々(昭和11年1月刊)を出版する。彼の得意としたのは人物評論で、中でも人物史詩という七五調で書いたものなど独創的である。

このたび中原中也記念館に預けられた。思索日記」という昭和27年に書かれたものに目をおしたが、俳句・短歌・随筆・読書感想文などが随時ノートしてあり、特に短歌には「ふるさと回想篇」と題して望郷の思いを詠んだものが多い。

また、「狸眠洞雑語」という随想が後半を占め注目した。鈴木大拙全集を読んだことや曹洞宗の禅寺に参禅していて、意外に思った。とまれ人生の前半はジャーナリストとして波乱万丈の動の世界を歩み、戦後は一転し、静の世界に沈潜して思索に耽ったようだ。

彼は幼にして釣りに興味を覚え、この方面も達人であった。晩年は釣具店を営み(もつとも商売は夫人任せ)、釣魚三楽会」を主宰し、『釣場速報』にエッセーを連載した。これは自分史のようで面白い。たとえば戦時中、上海で記者生活をして



平成12年11月19日、企画展「吉田緒佐夢の遺族茶会」に4人目、福山朋子さんと緒佐夢の四女、前列座っているのが筆者。

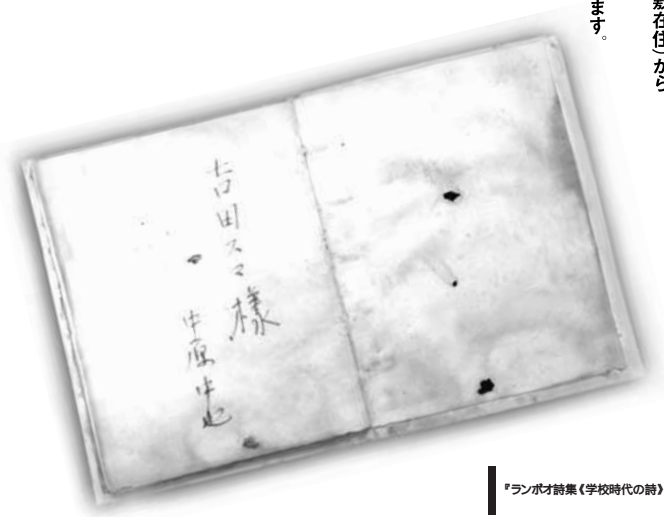


歌集「白梅」

「こたま」(大正2年7月〜大正9年6月)後に「木霊」と名を改めた。は、中也と吉田緒佐夢と歌集「末黒野」を出版した宇佐川紅萩が恩師と慕っていた。田村盛

# 中也直筆署名入り ランボオ詩集《学校時代の詩》

中也が遠縁の伯母にあたる吉田マに贈った、直筆署名入り翻訳詩集『ランボオ詩集《学校時代の詩》』が、平成12年7月21日、所有者である吉田正氏(山口市吉敷在住)から記念館に寄託されました。吉田マは、正氏の曾祖母にあたります。



『ランボオ詩集《学校時代の詩》』



## Jean Arthur Rimbaud

同書は予約の段階から大変評判が良く、出版されると刊行後すぐに売り尽くすほど売行きは良好でした。

大岡昇平によると、「印税がわりに出来上った本の何部か渡されたので、それを中原は友人達に贈った」り、中也は同書を「家系について相当な知識をもっていなければ分らないような古い系累」(中原思郎。兄中原中也と祖先たち。昭和45年刊。審美社)にまで贈っていました。

現在までに、吉田マをはじめ、北原白秋、河上徹太郎、小林秀雄、関口隆克、辰野隆、百田宗治、大岡昇平、竹田鎌二郎に寄贈されたことが分かっています。



吉田マ

マは、明治20年(1887)良城尋常高等小学校の教壇に立ち、教師としての人生を歩みはじめます。後に医者をしていった吉田義

『ランボオ詩集《学校時代の詩》』は、中也が影響を受けたとされるフランス象徴派の詩人、ランボオの高等中学時代の詩を翻訳したもので、昭和8年(1933)12月10日に三笠書房から刊行されました。限定三百部が印刷され、そのうち三十部はすいた紙を糸で中とした、当時としては珍しいしやれたフランス装の箱入り特製本でした。総頁は60頁、特製本の本文には濃青色用紙を使用しています。

この度寄託された詩集は特製本ですが、箱がありません。表紙をめくるとすぐ左頁にペン書きで、「吉田マ様 中原中也」という署名があります。

助と結婚しますが、明治31年(1898)、義助は32歳の若さで逝去。夫の没後も教壇に立ち、意欲的に教師生活を送っていたといえます。

中也の母フクは明治20年に横浜から良城尋常小学校に転校、同校を卒業するまでスマの教えを受けていました。フクはその後私立山口高等女学校に進学しますが、スマもそれを追うかのよつに同校に移り、教壇に立っています。高等小学校時代には音楽を、女学校時代には料理や作法といった家庭科を教えていました。

輩や名士の講演会を催し、自らは創立時に初代会長を務めています。明治40年(1907)1月には、吉敷村婦人会も設立しています(三坂圭治編著。吉敷村史。昭和63年2月10日刊。マツノ書店)。

教員退職後の昭和3年(1928)、教員生活で教えてきた内容を日常的に身につけてもらおうという思いで、「作法百首」と「料理百首」歌留多の二種を制作、卒業生などに将来の幸福を願って贈っています。

歌留多には、「かき玉子玉子料理の王ぞかし、こなれよという味も上品」といったスマが生徒達に教えてきた料理の心得や作法が詠まれています。

1937年、30歳で夭折した中原中也—  
没後60余年を経た今日、その詩はさらに輝き、愛誦されつつける。角川版旧全集を全面改訂、30年ぶりの本格的・新編「定本」全集!

## 新編 中原中也全集

全5巻+別巻1  
【編集委員】  
大岡昇平・中村稔・吉田熾生・宇佐美音・佐々木幹郎



各巻、前列のない画期的二分冊構成  
「本文篇」= 厳密な校訂による新本文の確定  
「解題篇」= 各作品の成立・推敲過程を詳述

- 第1巻 詩 \* 第1回配本 新発見詩篇2
  - 第2巻 詩 4月未刊行 (第3回配本) 新発見詩篇2
  - 第3巻 翻訳 \* 第2回配本 新発見散文3
  - 第4巻 評論・小説 (第5回配本) 新発見草稿4
  - 第5巻 日記・書簡 (第4回配本) 新発見「療養口誌」新書簡31
- 別巻(上)写真・図版篇 (第6回配本)  
(下)資料・研究篇 初公開資料多数 \*印既刊

造本  
四六版・並製・カバー装・美装貼函入  
各巻[本文篇 I 解題篇]二分冊(分売不可)  
予価 本体7,000円~8,500円(税別)

2000年3月より刊行開始  
第一巻・第三巻 発売中 定価=7,800円(税別)

角川書店  
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3  
TEL03-3238-8521 FAX03-3262-7734



歌留多

# 詩集『帰郷』



詩集『帰郷』



## Koutaro Jinbo

この詩集は、詩人であり独文学者でもある神保光太郎（1905 - 1990）の自筆と伝えられているものです。

詩集の総頁数は64頁、ほとんどの頁は黒ペンにより書かれています。内扉を開けた頁のみ朱色の毛筆で「詩集帰郷」中原中也／神保光太郎と縦書きで書かれています。その下には横書きで

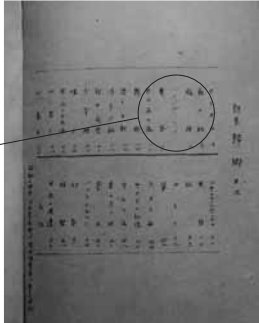
「南保文郎」  
という名が記されています。神保は生前親しい人に、「この詩集は言、自分が書き、遊びで作ったものだ。南保文郎は、私が遊びをやるときに付ける名前だ」と聞かされていたといつことから、「この「南保文郎」とは、神保光太郎のペンネームであると思われる」。

その言葉を確証付けるべく、記念館では詩集にある筆跡を照合するため、『津村信夫書簡・来簡集』（平成7年刊 帝塚山学院大学日本文学系）に収められている神保直筆書簡から調査を行いました。筆跡からは神保自身がどうかを確定するまでに至りませんでした。

しかしながら、この詩集が神保の手により編纂され、自ら書いたという可能性の高い理由の一つが詩集中に残されていました。それは最終頁の目次にある修正箇所です。

そこには詩のタイトル「白き風冷たくありぬ」を何かで削り、修正した跡がありました。中也の詩には、「白き風冷たくありぬ」という詩はありません。「白き風冷たくありぬ」

ぬ」は、「山羊の歌」に収録された詩「臨終」の第一節四行目にある一節なのです。



最終頁の目次にある修正箇所

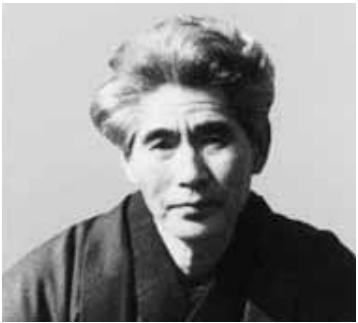
詩集『帰郷』の最終頁には原本として、「昭和十四年河出書房発行現代詩集第一巻より抄記」と記されています。『現代詩集第一巻』

とは神保が編集した同年発行の『現代詩集』の指し指します。

『現代詩集』には、「帰郷」という総題で中也の詩が二十九篇掲載されています。後記には、「全部で二十九篇 中原中也の遺した詩集、「山羊の歌」、「在りし日の歌」から採った。」とありますが、本来、詩は二十八篇です。

それは、神保が冒開きで紹介した「臨終」の2頁目最初の行にあった「白き風冷たくありぬ」を詩のタイトルと間違え、詩「臨終」を二篇の詩であると受け取ったことによりです。

確証は現在まで得られていませんが、前記の神保自身の発言、また間違いがそのまま踏襲され書かれていることから、間違いを思いこんでいた神保が自ら書き、編集した可能性が高いと考えられます。



神保光太郎  
出典／埼玉の文芸  
1997刊 さいたま文学館

神保は、明治38年11月山形市に生まれ、平成2年10月、85歳で生涯を閉じました。学生時代から詩作を始め、昭和9年10月、堀辰雄らの「四季」に作品を発表。昭和22年12月、「四季」は廃刊しますが、昭和42年12月、同人仲間と再刊します。

詩集には第一詩集「鳴」や「青の童話」などがあります。

神保は京都帝大独文科を卒業するころに、大学の先輩である阿部六郎（1904 - 1957）宅を訪れた際、中也と出会いました。ある日、阿部の部屋で、中也と阿部の友人が殴り合いの喧嘩をしたことがありました。その時のことを神保は、「その憂鬱を隠取っていたあの時のいたいたしい中原の顔は、彼の奏でる切なく、又、遺漏ないような詩に似ていた。しかも、その底には、幾らたかかれても、まげ難い詩に対する強烈な信頼を秘していた。」（神保光太郎著「中原中也のこと」と回想しています。

昭和11年、「四季」2月号の「四季消息」で、「これまで同人であった三好、丸山、堀津村、立原の五名に、事実上同人同等の厚志を寄せて貰つてゐた九氏を加へて、いまこゝにはつまり、四季同人として発表する」と伝えていき、九氏とは井伏鱒二、萩原朔太郎、竹中郁、田中克己、桑原武夫、辻野久憲、神西清、そして中也と神保でした。神保は、同じ「四季」同人であった中也の詩を、「誰にも真似がでできない獨創性を持ちながらも叙情性がある」と高く評価しています。後に中也を題材とした詩「詩人秋也の死」を作っています。

## News / ニュース

### 開館7年 入館者数 30万人突破



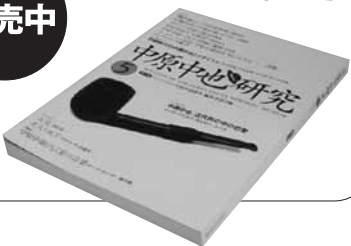
写真右より  
青藤享子さん、福田館長、  
ご遺族の中原美枝子さん

平成13年2月21日、記念館は開館以来30万人目の入館者を迎えました。30万人目となったのは、千葉県船橋市の私立八千代松陰高校二年生 青藤享子さん（17）です。青藤さんは秋と津和野を巡る修学旅行の途中、中原中也記念館を訪れたものです。

青藤さんには福田白百合館長から花束と『新編中原中也全集 第一巻』が手渡されました。また中也の義妹にあたる中原美枝子さんから中原中也の文学アルバム（写真集）が贈られました。青藤さんは30万人と聞いて、「頭の中が真っ白。中也の詩は教科書で読んだくらいでありながら、これから展示をみて中也のことをもっと知りたい。これを機に勉強してみたい」と話していました。

## 中原中也研究 第5号

発売中



エッセイ  
杉山平一 高橋文一

【巻頭】  
中原中也の言葉の音楽  
岡井隆

シンポジウム

中原中也 近代詩の中の恋愛  
京都時代の中原中也とタイムム

定価 2,000円(税込)

次号の告知

中原中也研究 第6号

平成13年8月31日発行

特集「昭和初年代の詩的青春」

問い合わせ 中原中也記念館  
電話 083-9332 6430  
ファクス 083-9332 6431

# 安原喜弘宛書簡

【特別展】 中原中也と安原喜弘

一番頼りにしていた友人への手紙展  
～『山羊の歌』刊行まで～

▼ 出品資料から

昭和4年、中也と河上徹太郎が中心となり、安原や大岡昇平も同人として参加した雑誌「白痴群」が創刊されます。昭和8年には、中也からの誘いで雑誌「紀元」にも加わり作品を発表しました。

安原はその後、次第に文学から離れていきますが、中也を生涯にわたって理解し、友情と愛情を注いでいます。第一詩集「山羊の歌」刊行のために、中也と一緒に印刷会社に足撃く通い、印刷終了後、製本にかかるまでの間印刷された本文と紙型を預かっていたのも安原でした。

中也没後は、中也を広く理解してもらうためにと私信の発表を決意、手元に残された手紙を昭和15年文芸雑誌に発表した後、「中原中也の手紙」（書肆コリイカ）を発売しました。昭和26年には、創元社版「中原中也全集」の編集欄にも名をのべています。

昭和5年4月、雑誌「白痴群」が第六号をもって廃刊。中也は主要な発表媒体を失います。加えて、昭和6年9月には、中也の弟・恰二が病死、孤独と悲嘆の中で雌伏の時を過ごしていた中也にとつて、安原は唯一ともいえる友人でした。激しい魂の衝突を繰り返す中也を安原は、常に愛情をもつて接し、心重く辛い日々を連続でありながらも決して見棄てることはありませんでした。「己が求心力の傾向に、傾聴すべきこと。今僕はさう思つて、却々忙しい気持ちです。」（昭和六年一〇月八日付）。

中也の魂はなお極めて不安定で、心痛ましい状態に変わりはありません。そんな時、疲労のど真ん中で自分の行き場を探すかのように書かれた二篇の詩が安原の元に贈られました。亡き弟・恰二を主題にした詩「疲れやつた美しい顔」と「死別の翌日」（昭和六年一〇月九日付）です。詩には悲哀の念が込められています。

昭和6年には、「Takana Taira」（十二月四日付）と題する美しい詩が安原のもとに届けられました。「少し正気づいて来ましたが、夢にはカニツがついて来ました」（昭和七年二月二日付）。雌伏の時からようやく脱し、再び詩作に打ち込んでいく中也は第一詩集「山羊の歌」の編纂に着手していくこととなります。

平成12年7月26日（水）から8月27日（日）まで開催された特別展では、安原家から記念館に寄託された書簡の中から、二人が知り合った昭和3年から中也が第一詩集「山羊の歌」の編纂に着手する昭和7年までの手紙を中心に紹介しました。書簡をはじめ、成城高等学校校誌「遊歩場」（昭和二年五月第三号）に掲載された安原直筆の詩原稿、安原自筆履歴書、明倫高等学校教諭時代の写真や大岡昇平が安原宅を訪れた時のスナップなど、安原家からの全面的な協力のもと多くの資料を展示しました。初日は、安原喜弘氏の子息・喜秀氏を招き、オンラインセレモニーを開催。中原美枝子氏、佐内正治氏、井上洋教育長、福田百合子館長のテープカットではじまりました。

## 安原喜弘

（1908 - 1992）は、父喜太郎（毎夕力の次男）として、東京・芝に生まれました。安原が大岡昇平の紹介で中也と知り合ったのは昭和3年秋。当時安原は、成城高等学校文科類の学生で、学校誌「遊歩場」の編集を手がけ、自作の詩や版画を掲載したりする文学青年の一人でした。



中也と出会った頃の安原喜弘

平成11年7月、安原家の信頼を得て、記念館に安原宛中也直筆書簡等が寄託されました。安原が中也から受け取った手紙は、「約九年間に届けられた手紙のうちおよそ半分くらいが手もとに残っており、」（安原喜弘著「中原中也のこと」とあり、現在約百通あまりが残っています）。

昭和4年3月、安原が京都帝国大学文学部哲学科美学美術専攻に入学して以後、京都と東京に離れ、会う機会が少ない安原に、「どうしてぬますか、僕は元気です」（昭和七年二月一日付）と書いています。また自分の生まれ育った風景を少しでも紹介したいとの思いから、当時はまだ田園風景の中に風雅を漂わせていた瑠璃光寺五重塔

（絵はがき（昭和八年八月五日付）や帰省の途中で立ち寄った金沢兼六園（昭和七年八月三日付）、友人高森文夫と一緒に旅行した天草百景（昭和七年八月一〇日付）の絵はがきなども送っています）。

ランポーをはじめフランス詩の翻訳を手がけていた中也は、フランスへ行くことを強く望んでいました。フランスを実現させるためにいろいろな手段を考えていたようです。東京外国語学校専修科仏語部に席を置いていた中也は、外務省書記生になつて渡仏するという方法を計画し、外務省書記生規則書の内容（昭和六年一〇月二三日付）も知っていますが、結局フランス行きは実現しませんでした。



「中原中也の手紙」安原喜弘著 講談社 1990年刊

## 2000年3月—2001年2月

- 29日 公開講座 「中原中也における詩の歌」阿毛久芳（都留文化大学教授）
- 8月5日 公開講座 「なかはらちゅうや今昔いんばち（小説家・評論家）」
- 30日 小企画展「中也の故郷～写真でみる山口～」（10月29日）
- 31日 中原中也研究第5号発行
- 9月9日 中原中也の会理事会（於 ニューメディアプラザ山口） 中原中也の会第5回大会 シンポジウム 「昭和初年代の詩的青春と中原中也」 パネリスト 阿毛久芳 加藤典洋 樋口寛（司会） アラクション 「歌とピアノ 金子みすゞを唄う」鳥田和美 講演 「＜青春＞の大衆化と終焉」三浦雅士
- 10日 中原中也の会第1回セミナー（於 秋吉台国際芸術村）
- 10月22日 中也命日・墓参り
- 11月1日 企画展「中也の軌跡 短歌～詩世界への出発点」（～11月26日） 監修 佐々木幹郎 和田健
- 10日 NHK-BS「詩のボクシング」収録に協力
- 15日 中原中也記念館運営協議会
- 29日 小企画展「『文學界』への登場～沈滞の時期を経て～」（～翌年1月28日）
- 2001年
- 1月20日 中原中也の会理事会（於 東京・虎ノ門パストラル）
- 31日 小企画展「『スレヤ』～音楽になった中也の詩～」（～3月25日）
- 2月3日 今後の常設展示を検討する「展示検討委員会」を開催
- 17日 第6回中原中也賞選考会が西村屋（山口市湯田温泉）で開催され、アーサー・ヒナードさんの詩集『釣り上げては』が選ばれる
- 18日 開館7周年（同日無料開放）
- 21日 入館者30万人突破

## 主なできごと ◎ 平成12年度 記念館行事記録

- 3月29日 小企画展「第5回中原中也賞」（～5月28日）
- 31日 「中原中也記念館館報」第5号発行
- 4月29日 中原中也記念館運営協議会 中原中也生誕祭「空の下の朗読会」（於 中原中也記念館前庭） 出演 三代目魚武濱田成夫 片岡直子 朗読ユニット「JAM」 他
- 5月31日 小企画展 「高沢亜季の和紙コラージュと中也の世界」（～7月23日）
- 6月10日 中原中也の会第4回研究集会（於 東京・アテネフランセ文化センターホール） 講演「わたしの知っている中也」大岡信 「『新編中原中也全集』の刊行について」佐々木幹郎
- 7月15日 公開講座（於 山口市湯田温泉・サンフレッシュ山口） 「中也をめぐる文学者たち」 傳馬義澄（國學院大学文学部教授）
- 21日 中也直筆著名入り『ランボオ詩集『学校時代の詩』』が吉田正氏から寄託されたことを報道発表
- 22日 公開講座 「中也とフランス詩とのかかわり」 平山豊（山口大学文学部教授）
- 26日 特別展 「中原中也と安原喜弘～一番頼りにしていた友人への手紙展」（～8月27日）



「空の下の朗読会」 三代目魚武濱田成夫

第5回中原中也賞贈呈式及び記念講演（於 ニューメディアプラザ山口） 受賞詩集 『いまにもうおっぴく陣地』蜂飼耳 記念企画 「うたう中也、つぶやく中也」小室等 聞き手：北川透 第4回中原中也賞英訳本詩集贈呈 『AFTER』和合亮一



小企画展

第6回中原中也賞

『釣り上げては』  
アーサー・ビナードさん



Chuya  
Nakahara  
prize



**第6回** 6回中原中也賞の選考会が、平成13年2月17日に、中かが結婚式をあげた山口市湯田温泉の西村屋旅館「葵の間」で開かれました。197詩集（応募189詩集 推薦8詩集）の中から、最終選考に残った7詩集で協議がなされ、選考の結果、東京都板橋区の著述業アーサー・ビナードさんの詩集『釣り上げては』が選ばれました。

選考委員を代表して中村稔氏は「詩集に収められた作品は日本語として美しく、手あかのついていない、熟達した言葉で表現されている。日常生活をユーモアに富んだ詩で表現しており新鮮さを感じる」と評価しました。

ビナードさんは「たいへんびっくりしている。光栄ですが、今後、中也賞の名に恥じないようにとプレッシャーも感じている。詩集は事物から発する言葉にならない何かを生活者の視点から表現しようとした」と受賞の喜びを語りました。

第7回中原中也賞

作品募集

【対象】

平成12年12月1日から平成13年11月30日までに刊行された現代詩の詩集奥付の刊行年月日による。

【正賞】

受賞詩集を英訳本として出版

【副賞】

100万円

【応募方法】

著者本人が、同じ詩集を3部送付してください。なお、中原中也賞応募と明記の上、本名、郵便番号、住所、電話番号を記入したものを添付してください。

送付先

〒753-0056  
山口市湯田温泉一丁目11-21  
中原中也記念館気付「中原中也賞事務局」 行

【発表】

平成14年(2002年)2月の選考会終了後、報道機関を通じて発表します。



◎ 平成13年度 記念館行事予定 ◎

2001年3月—2002年2月

3月28日	小企画展「第6回中原中也賞」 (~5月27日)	7月21日	公開講座	10月22日	中也命日・墓参り 企画展(~11月25日)
31日	「中原中也記念館館報」第6号発行	8月1日	特別企画展(~8月26日)	31日	
4月29日	中原中也生誕祭「空の下の朗読会」 (於 中原中也記念館前庭) 出演 谷川俊太郎 DIVA 他	4日	公開講座	11月28日	小企画展(~平成14年1月27日)
5月30日	小企画展(~7月29日)	6日	山口大学夏期集中講座(~9日)		
6月9日	中原中也の会第5回研究会	25日	公開講座	2002年	
		29日	小企画展(~10月28日)	1月30日	小企画展(~3月24日)
		31日	中原中也研究第6号発行	2月18日	開館8周年(同日無料開放)
		9月8日	中原中也の会第6回大会		
		9日	第2回セミナー兼文学散歩		

中原中也記念館 館報【第6号】平成13年3月31日

発行 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuya@ymg.urban.ne.jp

表紙写真 | 昭和10年代の蓄音機  
(機種名・POLYDOR polyfar)